

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-08

<図書紹介> 『ヘーゲル現代思想の起点』 滝口
清栄 / 会津清編 社会評論社 二〇〇八年

木村, 博 / KIMURA, Hiroshi

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

61

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

2009-06

【図書紹介】

『ヘーゲル 現代思想の起点』

滝口清栄・会澤清編 社会評論社 二〇〇八年

木村 博

ヘーゲル『精神現象学』（二八〇七年）刊行後二〇〇年が経った。むろん、二〇〇年の星霜は、ヘーゲル哲学にも容赦なく降りかかり、その盛衰を劇的に演出してきた。けれども、本書『ヘーゲル 現代思想の起点』は、そうした懐古的観望を旨とするものではなく、今日においても尽きることのない光彩を放つ『精神現象学』を現代思想のアクチュアルな震源地として解きほぐし、現代思想との実のある対話を遂行せんとする、そうした力作揃いの論集である。

同書は、まず、会澤清「プロローグ ヘーゲル紀行」から始まり、『精神現象学』の特性が「前提を吟味し脱構築する知」にあるという基本的視座が示される。これを受けて、第一部では、『精神現象学』の影響史がフランス、イタリアを中心に概観される。そのなかでも、宇波彰「コジェーヴからヘーゲルへ」は圧巻である。フランスにおけるヘーゲル哲学の受容展開がダイナミックに示されている。さらに、槻木克彦「ヘーゲルと仏人哲学者の友人ヴィクトール・クーザン」、西山雄二「欲望と不安の系譜学」、そして中村勝己「イタリア・リソルジメント論における《自由の宗教》のフォルトウーナ」がつづく。

第二部では、『精神現象学』そのものの内的吟味が、相互承認論・Entfremdung（自分からの離反）の問題・有機体論・悲劇論を軸に展開される。すなわち、竹村喜一郎『精神現象学』における相互承認論の位相、滝口清栄「Entfremdungと啓蒙の精神」、野尻英一「ヘーゲル有機体論と社会」、大橋基「神々を模倣する装置」である。さらに、（『精神現象学』を直接の対象とするものではないが）川崎誠「ヘーゲルとワイトゲンシュタイン——「論理に関するノート」読解」は、ヘーゲル論理学と前期ワイトゲンシュタインとの突き合わせという魅力あるテーマを取り扱っている。

さいごに、第三部では、『精神現象学』の現在に焦点をあて、日本・ドイツ・アメリカのヘーゲル研究動向が吟味されている。山口誠一「日本の『精神現象学』研究鳥瞰」、大河内泰樹「発展史、コンステラチオン、エピステモロジー、マルクスそして『精神現象学』」、片山善博「アメリカにおけるヘーゲル研究の現況」。本書は、編者の滝口清栄氏をはじめおおくの法政大学関係者が執筆した意欲作である。直に手にとって一読されることを願ってやまない。